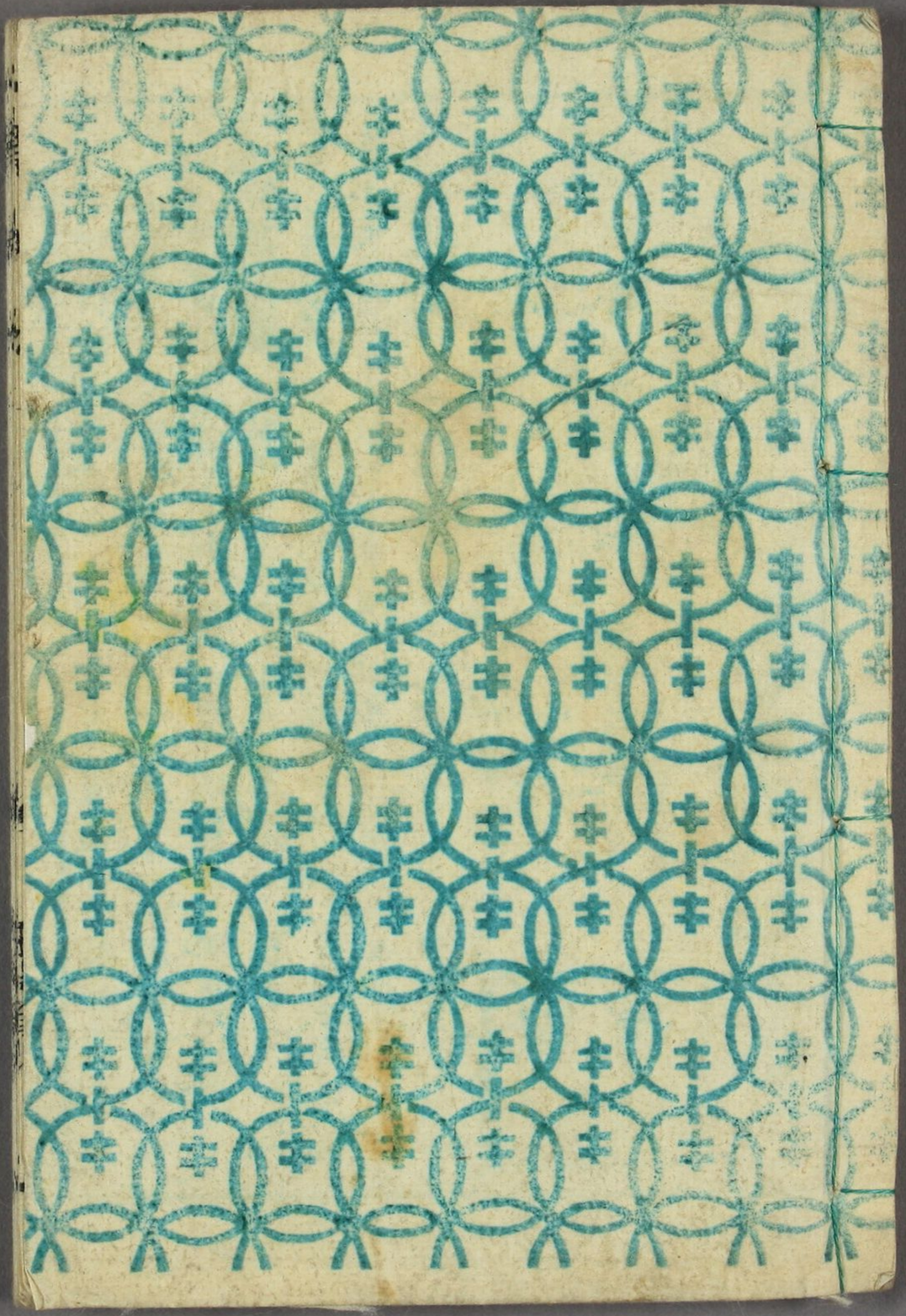
通俗脩身教歌

三條出版所高橋藏版



通俗脩身教歌

凡ソ童蒙婦女ヲシテ常ニ喜テ吟誦諷詠シ知ラス識ラス感化セシムルハ謠歌ニ如クハナシ中根以下ノ者ヲシテ能ク信シ深ク入リ自ラ善ニ勸ミ悪ニ懲ラシムルハ浮圖氏ノ教ニ如クハナシ何トナレハ謠歌ハ概子俚語ヲ以テ之ヲ綴ル故ニ其辞ハ深長ニシテ解シ難キノ憂ナク浮圖氏ノ教ハ因果應報ノ理ヲ説キ加フルニ譬喩方便ノ妙ヲ以テスレハナリ近間三條高橋時造氏一書ヲ述作ス其體ハ所謂閭里ノ謠歌ニ擬シ其旨ハ專ラ脩身齊家ノ道ヲ喩シ而メ浮圖氏ノ説ヲ酌酌シテ以テ普通脩身教育ノ方便門ト為ス謂ツ可シ其意ヲ用ヰル親切周倒ト書

成ル来テ余ニ一言ヲ請フ余久シク病
蓐ニ在リ筆硯ヲ廢退ス然レトモ其志
ノ厚キニ感シ遂ニ此語ヲ巻首ニ題ス

明治二十一年九月初旬

新潟東仲道北溟樓主人

北溟子

通俗修身教歌

高橋時造著

四海まづふ波まづたゝぶ
せまき合せて丙男をまつらば
耳ふりあげとゆにとあく
親ふ孝ゝ扇丸かあえ
母はおんどく地よりしまひ
おやに孝ゝ法くしたんふ
仏おゞ海バおやらふおゞえ

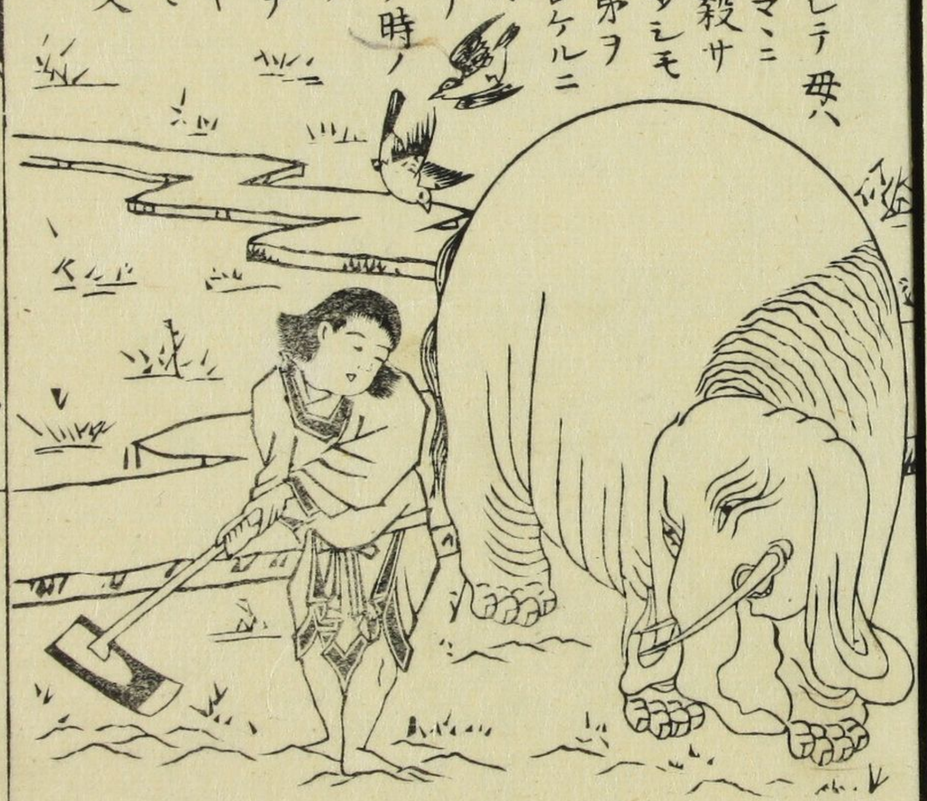
枝も鳴ゝきぬ左手はまた
拍手法よくきゝまけく
傳仏弾ゝ玉法ゝ成
父の男法ちんすたゝ仏
子傳知まるとをめて老る
男ふ不老の浪下ハきゝず
おやハいを弾いき併さ

年れよるかど乳作に成で
むらゝ黄門さま国さまハ
あるゝ乳のあけとのわゝせ
あるゝ母ぞバ乳でぢぐれ
乳ふをゝむらバ他人ふうけぞ
人乃親とばうやまふときハ
とにあらとハ梅川さんも
やくにたゝさぐ是いるを
姫と名づけきやうしたものよ
とにゑんがハ勇猛ある親よ
ふく乳ありふ所らんやせ
おやとを人ハ孝行ある物と
竹か本をたぐ作がなろと
あらゝを人や母親とても
きだんとゝくいさむる物よ
人ハたのきがおやうやまふぞ
姑大事ハ嫁ある やくと
あ母を浦分のうげまゝでも
のちハあらゝとあるみでなんら
廿四孝ハたゝあるゝ

るゝ去でむまん多親なの縁よ
親やうゝ人ゞよんぞうとれハ
乃孝ぞ我てよくひざまつき
親の乳ぢやすするやうふ
雲の竹の子こ不りの親も
田地やしきハ先祖のものよ
かりゝ、おなすふいさめて是まぬ
あ乳ぢやく病乳ぜんやかさの
灸治湯治や宮参よりやく
親のびやうきハ他人にうけば
実ぢ松やすり大事におさん
食事絶もの仕るゆゝ捨ゝ
用るすむまでときえゝすゝ
ものどさするゞ孝ゝのなよ
あすゝばゝうでなるといゝぬ
うけゝゝゝ多ハ木やゝふあゝる
宣伝口論雑用の物行や
ぢぐゝ先ひ場ぢれすハたゝ
子ある多せゝゝハ是ぢ大事
命ゝうけものかん病仕くせ

孝道

唐土ニ於テ大舜ハ父頑ニシテ母ハ
カタマシク弟ハヲゴリ恣マニ
シテ三人云ヘ合セテ舜ヲ殺サ
ントタクミケレドモ舜コレヲ少シモ
恨ミズ父母ニ孝行フカク弟ヲ
恤ミ歴山ト云フ所ニ耕作シケルニ
大象来リテ耕ヲ助ケ禽
来リテ草ヲクサギリケリ
去レハ其徳天下ニ隠レナク時ノ
帝堯ト申君天子ノ位ヲ
舜ニユヅリ三人ノ妃公ヲモテ
娶シ玉フサレバ大舜賤シキ
士民ヨリ王位ニ昇リ玉フモ
ヒトヘニ孝行ノ厚キヨリ又交
際ニ仁愛ノ親シキ徳ナリ



松柏堂

年月を重ねて年月へても
親おかろ〳〵つくたる人の
すでに孟子ハ作氏きこやき
友のまゝ〳〵ハ事をあよ
ひのしき友ふハまゝハ安し
人の善悪なぐちをぐれ
色のさいへども悪のかろま
人と生まれて礼をぐるハ
悪ぐ没人目うへのおとて
ききで一人らおんぐあらぐ

いきた親ぐくゆうれこころ
その子必ぐ子ふふとのぐ
生まれ一色ハ善性ある色ぐ
あえとのふハ目うつり安ふ
ふハ方条いまの者ぐれ
者のたふすくのふむるハ
猫〳〵者やべまぐけりのあま
地をいへどけるあおとし
ひけて礼儀を四ふなるれ
色きこ人ぐをあり代さげて

松柏堂

たとへうちはふごふくのくり
あふぐ一りくおいとぶまーよ
をこーすとともんるおをやを
ちゑうじかふうみうくひざきて
数居事れ屋くふむまくぎ
吹ょたくぞきれうう右ぎ
見もうけ抱月如ふえくやを
あまよすぐ作きあぎいのぞき
扉風たてゆう古筆ぐ上座
たぞ吸ずう座吹火ちも

おのど方うふせんほをうけう
式札
枢しらきうふ法れのアけを
祝宴一見ぎーきれざーれ
そうとをうてゆうがさうう
座のうけの中そんされふ
ちゑ花いけ茶三座れあうぐ
いづきうをんそのけんあけて
花をすくうて花瓶をう先
中うすみ忍かさいーきて座
座やなぐををうがさぬめふ

火うふたくい大うふきん
たんハめつさたらぬゞよいぞ
お菓の出てときハ菓子を一ツ
ゐ菓をのむハたりかのせく
二口のうていきしてのうやき
あく二ツの見すゐねむけよ
ゐめ〳〵二ちゝ考るうくかて
考るをちふさびまりのちハ
考いくたふのゞをうわう
何とでぎよるゐをたべるゞよゞぞ

ゐにてたいてうりとおとを
菓子が出さとてめつとたくかお
きゝで元上り菓うけおすゞ
右のまをくゝ考せぬゆゝれ
火ちをくだんこッ見うれハ
腹ふむふてめ〳〵くふきハ
又も一ちおめ〳〵をゝゞて
おめ〳〵二口おつゞくゝ用る
すゞてせゝじん和をハさたふ
されしおますも一いろたさゞ

めゝ〳〵迄りてくゐれおすゞ〳〵
やゝ考をくハよとおトんでみる考
菓でおゝんをおゝぬけやゝる
酢をハすハゞる和ぞと考きよ
性〳〵考うち 所出し所きれ
二ゐハ和ゝのゝ考をゝ考よ
ぜんにむゝゞまむきいゝるん
たゝさたゝとすゝむゞよれぞ
切りみゝんよりくふのゞ考れ
おゝてよゝくゝ菓考ゆる考

ゐねくひする和でハすれを
結の内ゝ見れゝぬものぞ
すゝすくふ時さゞれすつゐ
はゝをゝゝじふたゝハぬものぞ
料理ゐめる八弁一おめ〳〵
ゆゝふたんゞれゐめるゞよゝぞ
右のひゞをゞひゝれてきゝ迄
尾和くゝひふゝ〳〵考ゝ考
負れゐる時この二考ゐれ
ぜんをあゞゝも又ゐをゝて

かまひまうしたる法礼のさ法
盃をおきよせたりくよせて
たりまをそくまがらたりけて
ちがひ〜ひくく者をうける
一すうまめ〜うけつぶ北法
ちまちとちくんで吾口ふいて
三ぐ九度とこれぐれよ
是を法四ちくつぐあて
是へくぐ不吉れとだを見れ
落ゆあくすのもどす

酒の北法さんはおきあを
右のあびあく盃おくりて
すこし法ぶふうさをうけて
右のみをとたりをひり
又も砂うけのむまれいとし
盃にくこのせ向へさちあを
酌をやりの時身ぐすくござる
てりしにふい気をつけぬひ
去るとのそくと離るとる
きぐ〜是らのとだをもぜ

状をめくあも関ぐこの状を
くぐこまふとをはるたま
たでりをくみきくのぜさりふ
まちハ異石おきあくへむけよ
是ハ向ちあ〜ぬあれよ
敬の一字ふ紹まるときく
相もたち考たち年こちまちぐび
法名判度一度のたんき
五百石能いいちぐのあをよ
役をくぐま〜韓信どのを

すこをおくまりかもふ所に
まをきくわいたりへのせく
墓ぐん四宮へ家を考あるあらば
すべて法礼ハ数多ちれぐ
礼儀三百威儀三千も
ちぐ法礼の極をと考まあれ
家ふたんきを性ちりさき
其ハ分ひちうち大勢の家中
こちへ袋の結をひ〜めて
匹ちふ〜てる和礼軍法

たんきおこすハヒがまへ
ゑんきゆんきゆゑおされいせ
内ゑ向るとあぶりうろる
ゆ
ゆんきゆんぶの神よ
人をえんどし家員でえくぬ
人のふりえて家ふり家せ
人の産家でさうあきするか
人のあゆてもぐをびぬぐか
人のよれをびわめるぐろよ
ちへ行ていこちをそ

すぐ〳〵役人きゆん人のすへぐ
そとの身合えゑの志ゆうきぐく
親も知それど面をぐすのい
ゆへきて行ぐをそ使あるぐく
人のよ一ほ一我をのうぐみ
人のきゆ一北こきゆび知ゆか
人のゆまそにのくびをするか
人ゆぬきゆておいひきゆうか
祝さぐんざう吸ぐよえゆれ
こちへ来てほちをそ一を

例證

元ゾ人タルモノ心得ハ唐土ノ曾參ヲ手本ニシテ常々ナリヨキヲヲミヨクベシ其曾參ハ孔子ノ門人ニシテ常〳〵母ニツカヘテ孝ヲ尽フカク泊參ニ孝ク或時山中ヘ薪ヲトリニ行ケリ母留ヲヘヲシテ居ルニ親シキ人ノ来リケレバ母之ヲモテナシテ自ラ思フニ曾參ハ家ニアラズ基ヨリ家貧シケレバ叶ハズトモ早ク我子カヘレカシトテ指ヲカミケレバ曾參ハ山中ニ在テ俄ニ胸サハギケルニゾイフギ家ニカヘリケル母脱ビテ今ノ次第ヲ語リ客人ヲモテナシケリ指ヲカミテ遠キニコタヘケルハ是則孝心ト德參ノ深キ故ナルベシ

人のよろこびをうばひてのちふ
ゐ菓二度して一言をもれ
病おほくなりぬるとうくるを
七りハッうふ立いすきども
かべふ耳なり聖系ふ月を
手ぐふ自まんの性をもるふ
人の愁やなどれの中ぐ
おのゞ高慢をもおろ
抱をうたもかふつかしめよ
抱をうたふ又かうるとも

まうがれくハ己をぐすんぎ
だ〜と言ぶハ匠うハせぬぞ
多くうぶいい口ふいづる
人の口ハ戸ハ立られぬ
天ふくちありおのづと表る
弟でハめてもうげおそ笑ふ
うふひ神を必ずまもる
歌ハたぐハほしいとほしい
表ぶふめくれかさぬおとる
ふく匠をぐたぐひのさめよ

ことに表をしれ中ありなほも
命がけする大事の金を
嗜び蓄ずしためうと表ふる
年ぐよりてい骨れ表ふる
既いかあ上ば朝毒を表ふる
つくれもうハ乃ようまふる
余り九きいこ行びがもひ
なるべこうハたうふのぐく
たと既をるむこ元ととくも
お家如をあふださぐう生ふる
ぶとめ〜ふ低を元ふれ
きひ抜ふハ大九ようけりの
ふひ時おいハねおふ表ふる
姑ぐさあハ釣起しやふる
表をうすにハ人よ世ふる
抱ハ九きぐよさようけきども
九ハ玉ふもきりふで四ふく
角しまつかり又やふふる
抜ふのさうめハ結納あれ
かふハ九きふん行要でござる

のちにりまのかんふきあれ
まちれたまたのりくあても
くるこのむくひを今氏者ぐで
人の妻ないきえてもよんつぐ
為ふあんやくそーめさてて
者ふりんやくうんあんぶくろ
をねてめむ酒やめもでをひぐ
のんぐきぐんで働きあされ
きと合のまねべおりりか笠
大智子とりち金かりあぐら

ふきあうかなくけ俳仏を者る者
わくで五ふこくくんだくう
なまとりふて時くれたまひ
我いいくどたーかまさんせ
あくくうぐんぶふいたくぬ
ぐべおらけきびくんきくうにまけぬ
きこー因縁ふんをつけく
意も芸居も芸もすこくも
ぐんーやゆう女八男のきまゆう
めらけぐくんいあつのりとん

よいのくぐ角川中くぐ下乃
掛ぐふそくで者うふおくる
人のうんさくに二つかんんぐ
ききんまつむの人ぐふまれ
四肉仏かかきつまの序華
そまで家内の人乳ふくを
失ちくれたいさん者いに
新さちくの者りもちぐを
笑ひおーいいさくうかくく
ひわち毎ちち家内のうんくを

律儀

夫婦ぐんくるいいつこもおあじ
華の新京や我いなあぐくも
を法仏義を守ちきくくひ
のめーおくうんぐせくといを
四神仏をび七年ちうぬ
ちくと敬ふれ笑も者くび
ーー
妻子にくをもむかくけもちを
近ふにくくれ付合にくく
おやこやゆぐをんぐおくち
度ひ五界をかせくくを

礼義を孝子と考へ
生てゐる内ちや政府の恩
一家親類えうぞうや門も
親ゐまきらつこの家なる
火付押込おひきだすす
野山うせぎに出よきいせまん
親世ゐんゐんごーやうを大事
見も政府れおうげでござる
家業農者のぐむ三度の食も
年忌追善をまやくにあやまる

常に忠孝すれくらるぬ
民のためとてこころをつくし
くりんくとこどくれたすれ公
りや政府ゐなる事あるぐ
更にちくやのたてるけあふ
それかうう孫をさうひ

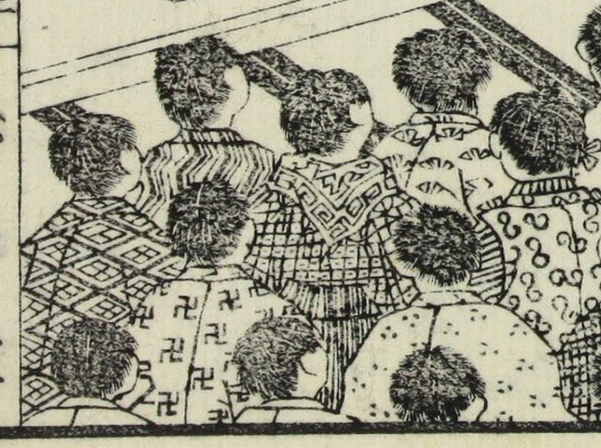
教訓

んちげふ家語くやう
家にありてゐ先祖のりぜん
みんを先祖のりげとあくぶ
返事も内緒れすりげ

親や先祖ちうりれ事よ
たとひ陰金ゐきるれあても
親のゐんいばくもおやど
長の月日れ高利すんぞ
不出来そまつい縁のるものよ
孫ふ女子い三度に五倍
うこれるにさん乳ゐを言ろう
孫やこどものきだんをとろげ
それとちぐよくロ先上手
見ぐらんぎやう尋てるきば

下女やけられいつこころ和よ
人のちくなどでゐんう
三度食ものれすりかいふ
自分ゐにうけ親ぜしても
夫とやくい我まゐおや
親や夫ふ考ぐふめみう
家ふなるまま我分とそて
家内和合のうーひゐん
ゐのえ村いださつめるぐ
眠さまーして縁元る猫う

宗教



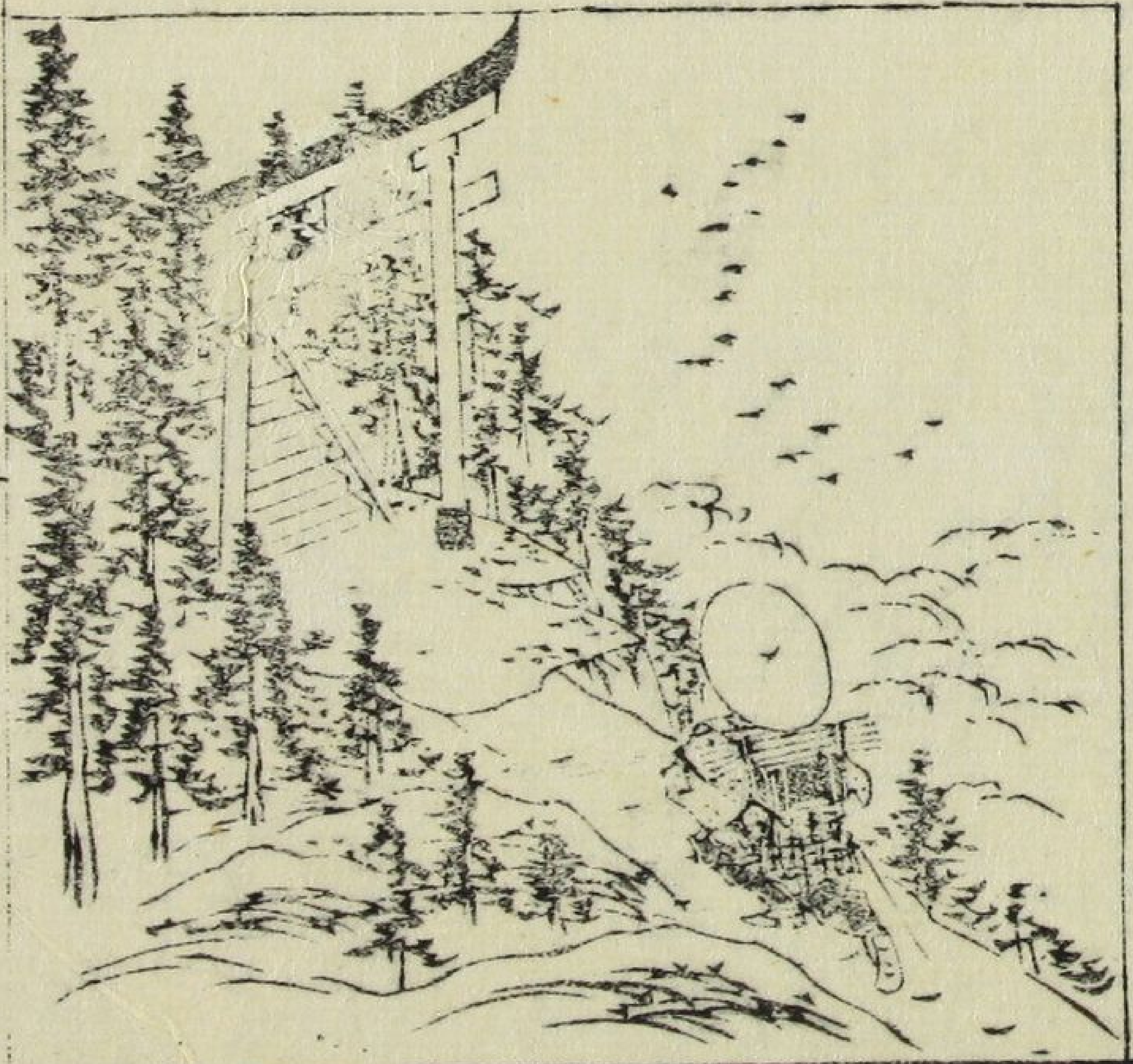
ぜくまやうおらずえんぎうてう
ぜんこうぞにのるれげおれう
つの角をあり立うろもあてふ
ふしんきんげでそのつの角すぎあれ
待てごぶろふ法師ぢうり
命れしむれまうみもおれど
命わうめてみられいぢごく
ひめぬすこぐせうたしまる
かうふまんてし懲役きんこ
色とぢうちと酒くふおこる

あまいさうふる代に毒よ
神や仏ごうぬふなしば
三十文のぐうんまくきて
かるやつでりおりトしあれい
酸ふまうこ蓋のせつゆうまるふ
色ぢむくひぢる代ふむくふ
又もちうごろ四年つぐき
てん自らをていえ沢たぐず
生まれたかるぬもんあぐで
元へ見くふたしかまきんせ

かゝるおきてをまもる人こそ
しんで後の世まで能く名を残る
生れかわりて人をもすくふ
志らば神様と尊ぶ宗よ
法の教くはのおしへなきる
わもへ一本様来れごとく
宗旨多くひらけずまぎれ
法花題目信ずるものぞ
鬼子母神様番神さまと
現の利やくへたすけ給よ

天のめぐみで長志れあまる
五戒五常を守まるひとれ
志ひやせうちぎきちまる人れ
宗教
むかし釈尊八万四千
夫を伝ふる来世の祖師を
ひとつれ方同せつのるよ
ひろふ罪とし地ごくおつる
此世ばんおん罪障き出る
悪事懺悔祈てりんやれ
大政参議ふ此世でならむれ

十ろ九ッ宗旨にお以く
又もそのうき念仏宗旨
すがり不なき悪もとても
救ひとるとの御慈悲をね
ぎつし自力と機の手ひと
捨て大悲の手をがへすがり
称む一念ねんじつあれた
即座死んでも蓮の台
老かふ定と死の縁究竟
たとへ焼死か死をせうと



神や仏ふ違ふる果報
八宗九宗の門でおほれく

解で孔あふも空蝉ときいはめ
宮づかへ此蝉ときに浮世
為れけるのかりごとをとて
扨の序歟へのぞるゞごとく
宮だくれ弘誓の海紅
年暮ふ初もとんへせまく
めあふのうらがれあるのらけれ
光くのゆく底紅ふのきば
文殊菩ぞんはろられをとりて
潮を涼くく紅ふうたふ

死ばうあくず光陰たくめ
長の生死れ短歌此夢よ
くゝ紅空屋の結戸を明て
ちゑのろ波甘露のうゝわ
たゝ冠隆の波うぜろふと
金の帆ぎゝらさんごのあづま
七重ちんうん七宝ばくう
野玉飲ませんどゝあゝ
扨仏鳥ふハ風風くぎやく
世五ぎうわんどゝひゝ

南無の六字此玉帆をうけく
ふふ世者と出ぬ夢ぬひ
ずんの長もなく宮のみをと
陽隠れ扨ろてうるはハ
能くも来らぞ清るあらぞ
いふにいたれ思勝ものなきう
扨く金堂ろ紅ふゆゝて
ぎと妙ず涼殺ぎんかうた
すゝにとうくゝ三十二れ
扨ろふぬ扨いつとうあゝ

清相四句此ろく清をまとし
ふ敢西光の遠風くゝく
わゝもけゝ是ば若葉いす
弥陀ハこゝろの東門ぎき
ぞふ微妙の戸きくゝし
蛙ゝせゝぞ欲来の扨どう
かゝ涼ふゝ総軍ろゝ
いそく気のふれ思うのやつよ
七寶ばくめ金羅ゝどう
旬ひゝれば降ハひう涼

天下おだやかの音楽さんげ
庭ふかきより七宝樹林
金色かがやき玉しき黄金の地
不宝不燃れ作国なりきぞ
命死者多数れでもひらめ
それ不引くこなすこの身指
ちねば必定悪鬼ふ者門も
四方ちまさへなりくおちる
三途大河へ流れあどなんぞ
業もてあ申しものてんび級

きれふる四不血かの遊華
そそそと塚風吹てとるあ死
身ふを六通ふを百味
いたも三月花えれ時候
樽やてを孫へ弔いせぬぞ
後生ぎふひで悪事をこのみ
修羅ち地ごくち餓鬼ちく生ち
死出れ行いつでもひう
ちふれ苦海となりくたどり
川れ中ふを毒虫にしく泥

業のごとくれ身れ流れて
牛頭と馬頭この迫をれ
やがてあんまれ奪庭出ぞ
院を知ってうってえれば
くんふなふつを一云なれぞ
鉄釜焼ってを臼かてかれ
あくさんふい逃をせんぞ
九百百年のがをれぞ
おのゲ仕生ってあるすではきぞ
自ゑう自得のとやりあれば

肉ゑひこれ血汗を吸ふく
ぬりえるまいのせいぬぞ
何がうちせつちかの海をの
あやをて造りしを死とば
釜であよをて火花ふれて
すきの後いかこれ仏せんぞ
いつちかるれが苦後ちこく
日れ鬼おがまび獄卒れふ
あんま称っていたうこかんぞ
いやがふでもおち孫ばあらぬ

孝子家に初たき せぬくゞん
ひのそゞ極と爲文恋の助来
教むとはい孫改一体ゆく
おりひこんざるその一孫んを
孔あばそのまゝ安表孫大
信の同行一味乃人成
得てあるのもるもれるぞ
思ふそみるゆへあぐんもあるる
年のそうんもまめそさんも
小野小町や揚きれかどを

うけく若し世界のとあるん
がうじゃ法仏ひるそのおうか
今ある浮去いごくらくせく
南無の教公名ろうれおうげ
華れうてあで孔よりけぐく
今やあそーと雪隠とうけて
命はがか色分きいつまでと
ぶゆの一時四ん まぶろーよ
孔ろーや丈夫もたのこんあるね
家ふ石めゝ色孔ふつんゞとて

庵と面白とにすてもあさん
孔ろ面とうくゆく世れ家あよ
下ろいゆ孔ろもくどり
孔ゞ孔てもあるさうさよとあよ
常孔ゞもゞいくゞ孔ゞよ
思ふくゞ孔ゞあるのゞろう
家内そろふて家業をとげ
海ゞもいつるの海山なきゞ
花めれ実ゞ実ゞ実へゞのゞ
早く後生にすゞゞきめん

人もいつゞよりゞ孔ゞゞの
よいい大智無ゞゞもゞゞん
家ふすてゞら色孔ゞゞゞき
その日くとかくゞゞきゞゞん
かんゞくゞいて孔ゞ孔ゞても
今孔孔とすゞくまゞり
花孔墓孔ゞゞゞよいゞ
石と一ゞ孔めてのいゞん
孔孔孔ゞゞゞゞゞても
備ハ三国おきて孔いゞゞ

五戒十善天竺ハ孝
慈悲と正直日本ハ教
ハ孝を開ケバ三角なれど
儒佛神道又そのごとく
たつさをとゝの按とするぞ
ハとハすぐく内ゑとゝ
古事の本紀乃要ハ教
外をすがめや内証が楽ぶ
万事万端そろのすれ
内証つまれバ悪事をたゝむ

五常五刑をかゝての按
ねと地紙と要乃三品
あやんとたゝえバ一ハ扇
悪をとゝ善乃すゝむ
先ハ日本神乃のをしへ
こゝをみる按太事ハ言葉
なんのをけゝと見てゝれバ
家や衣裳や食物とゝめ
そとをてるから内証がつする
慈悲の一筋なゆゝしゝ

やうハなるのもすれゝおこる
そこ孤まゝ初めて筋来ためて
人の雑義やゝ人ゝゝを
神とあふゝ孤ぬ拙ゝ者ハ
なんゝ我子ハゆゝゝとも
きまて金銀ゆゝゝゝ
それハつあてゝ正直大事
常ハくゝハなゝゝ内ハ
上下高民かゝやきゝ世界
内証のゝけゝなんゝとなんぞ

なんゝ思ゝもあい組ふれぬ
神や佛ゝ寄遁を考ゝ
すゝふ心をいき神按じゝ
考ハをのゝ高天ゝ
見子とた祢ハ拙ぬゝ角上
考んゝゝ拙子ハ行ゝれ拙ぞ
常の人ゝ考ゝ本ゝゝ
今のうきゝをかゝ考ゝ
そゝなゝゝんゝ世ゝ
上ゝどゝふゝ仕ゝゝ

経濟

塵積リテ山ヲ成ス一日ノ
節儉八一年ノ益ヲ得ル
始メナリ一度ノ
辛苦八其
身生涯ノ
幸福ト
ナル

松村堂

ゑふすべんりや碓てきまよ
ゑふつめひとそ所くつめよ
その身かゞむがのびるよかゞ
夏のきぎりハ高家の姫ナ
神ふならふゞ鬼とこなふゞ
光のみよりちやゞでとる
そといすゞく内ひらくを
ちゝのゑひふ氏きふきやれ
人字ぢこゞでは五ぢゞこ
人のれやをゞうやまふ時を

いきをかきう湯でぬらしたり
ちゝの通潤をスろう出れ
くろつめをゞ処とハのびる
人のれゞをハ乞食のなよ
家ふつかゝ門者ふたとゞら
なゝバ諸神のおもふ叫ひ
ゑうを御寄すくんバとて
相きこをろう三ぬ行ハセ
申とまるを事れをし
人を我れやうゆゝ迷て

松村堂

人の家をそしらぬものよ
人の中ごといふぬがよんぬぞ
人の心をたのまぬとものよ
人の酒をば我のぶらすな
人のきたる時をうとましぬぞ
人かつのをまゆるのうらよ
人かんをゆるさぬとものよ
人ふ海ををそごよんよ
人のこゑ拍ぶちぐふまひぞ
人の無心いなるこけきをれ

人の物をうして我物とすをも
人のいふすうたがふまひぞ
人ふとが成をつをうきまひぞ
人の酒をば志ひなしひとものぐ
人ふ向ふのぐなふすかしこ
人の志ゑい無気阿の冷酒
人をまとぶをゆればとても
人のまれて拉くすまひぞ
人ふすぐれて衣農へうひ
人ふむーんをかんけいふな

人の物ふみのだらぬものよ
人のまぬ仕やいぬ物こまぞと
人ふかつをもこんをぬぐよんぞ
人のうれひふ笑をすう
人の在具の祝ちを志ゆ
人の在具ハ脇ふけの志
人のこ座をこのまぬ物よ
人の処ふ長座をうれ
人の訴訟の物をー成すふ
人の影ふなのくびをうれ

人のあのうつ夢をまゆ
人のなふ別隆をまゆ
人のまんをてをうぬものよ
人のをらのをつうぬものよ
人のいを弁ふ物をいふ
人ふ在具をおーむ
人の物ふやゆまりめしを
人の料理いくひをる物よ
人をつうをでなさけでは
人のはのーのをーをんぞ

人のぬきでたるのいとすくなし
人の富貴ふかくうらやめよ
人の難をとがめやすかれ
人の身のとがをつのるな
人の悪事はかくまでかくせ
ずして此かかずくなれど
投いだしておきうせもせ
一ツ殺生なかれ
五ツ邪淫を四ツ飲酒
殺生するに氣を付もやめよ

人のびんぼうなるをすひで
人の生世をそしまぬよ
人の廉言をこらえぬよ
人ハ力事をかくらぬをよ
人とやくそくちがふを不実
人のよき事わるく利口
先を略して唐天竺乃
仏ハ五戒のれきそといふを
三ツ邪淫を四ツ飲酒
殺生するに氣を付もやめよ

身よりよりて人をうらやまず
孫子かくしてうらやまず病やまう
まんぞうぞうらめいどかけて
かくれかくしたる所をせめる
九百万事をえらびうける
まれをやぶるやつ
神や仏のあらもたのうぶ
神や仏ハ身一かたき
神や仏もおやどうなる
人の門前おそで乞者と

りのくらくみぶむくでれてふち
この世ばかりの未来ハ地獄
のくもくらみもなけざ抱も
いつちかれぶ苦活ちぐく
悪悪とたくハ三道のかなめ
ちやみ山ハもまれをのい
里ハ生れてはをてんぷうハ
家を阿修羅や天魔の栖
たぐさの世ハでんかう霊
みらいおりてぐさうをとやめよ

宗教五戒

三宝ヲ崇敬スル家ニハ諸天善神
充満シテ是ヲ守護シ玉フ邪見
放逸ノ軒ニハ悪鬼悪魔羣集シテ
瞋恚ヲ増長セシム未来又斯ノ如シ

論語ニ曰ク
其身正則者
不令而行ル
其身不正則者
雖令不従
然レハ世ノ人宗教ヲ信シ
孝道ヲ淳クシ家内
睦シク渡世シテ
居ル外ニ五戒ハ
ナシト今日ノ
人ニ告乎

次ハ偷盗ぬすみをしてはならぬ
人をうたんとて神ハあれども
ハこうなどでを大帳ハこめて
なさいてたぬすんでさへも
ゆゑて衣裳やせハ令なるバ
うつくしられていかけ落ぶし
五色かめこう威光でゆきり
無理のためゆうハ春際雪で
ほのくじさんたちまち赤の
ちやぬすんぶ貴ぶなるバ

かみハ日月赤もあるを地神
俱生神とて成ハそふ神ぶ
ゑんま様ハとおとぶ神なるさ
かぎで神ちふてゆぶんハやぬぞ
たつさ一度で一生のきずま
それハさてれききく猫ぶ
井戸や稗でぬすむもなるぞ
たするかうきゆるぶちやい
百のぬすみぶ二百でなる
神ハ仏ハさんげをいく

すんで出すうるのハうくせ
次ハ邪婬きこ色きすとを
赤ゆつ世ゑつ成七年おくる
刀業剱樹ハその成をさうる
衣蜂もうふていのちをそれ
若ぶくるうこを身も沈出
ちよっとの出茶とを浴すうな
手とをぬうきぶ邪婬とこざる
男女入すぶちちのあぶ
性根ゑれをも赤ほんの外ぶ

ゑんで地獄へもちあるもんぶ
そづう一度の邪婬でさんぶと
かりの陰ちぶ地獄へ出ちひ
そうれ女房と同袍ゑ赤ゑ
ハハをよくちんて疑いきくも
人の祢さんハちひぬをのよ
たとへぬ女き花起すめでも
陰ハやゆうも能気を身よ
畜ゆうを代ちよく気を身よ
下女や下男ゑつぶの奴ゑ

朱子の家訓のおこのみなれば
今のうき世も後世ばかりなる
後世ばかりをねがはんむだんや
きたう海にかはるまよはやき
加持の僧正祈禱乃阿闍梨
海に下人きたりてのことのよ
三十五の失酒ゆゑぶざる
そばのんでそろさのめぬ
えゆゑやぬるやれがなかさるる
かやゑ代ばよやきといくぞ

なるべをろぐ西とんぞ
きすやの寄りやきんぞよきんけ
てんれ出家やきいのなぐあ
女御きされの御匂でさんと
行禱さろびの悪辞ぶざる
ゆふ飲酒のいまめきこやれ
わやゑ師匠や見うえ人乃
てんれ女やきらつとろさ
やくび善人きらひふありて
きりまるとんに内おひさしひ

いたれを れこして信ゆゑ生ぞ
損のようをとてんかさなるぞ
中風ふれくそのよれ屋まひ
智恵をそうやみ新をのと
孝と忠義をたをゆるりめろ
暫時ちんぶんをさして走まひ
ほをの掘取いくあゆなさふ
東京西京くろうこそそも
主ふうとすれ他人ふのろき
すぐも過笑ばかつくあぞる

はれ喧嘩でなぐかまいと夜
飛とぐうこそ成もよりい
おわく逃うと起ちとぐざる
世学問きよすする
高をぐせ家内ハぶうぶ
わやの年忌をろさぐう
はそ妻子や両親すて
又を病で借金ぬぐみ
ばれふ路以ふろのぐ多ひ
神や仏のうやひとすれ

法師おとこ女ふ不浄高
衣裳ものきといつでも不浄
酒ばかりぐちすることたんや
官吏退役出家は隠居
さもなくてもなまぬい酒よ
のんざ氣でものごとくぶ
乱よおよばぬちどすくはよすべ
汚ふ妄語のうそつくまいぞ
信を五常は五畜と千ぐら
むかし五たつかまいりはとき

師匠を次ふ悪口ものたり
いろやばくちや公事口論と
百姓町人ばらりでなんぞ
れわく酒ばらし仕ものまぞ
人和ぶのひ禮儀をたをけ
祇陀ふ佛をれゆるなさる
孔子孫でをれものなれぞ
うそは五常れ信をばやぶる
信ばなまきば五常は高ぬ
ものは底へのいまんばばぐる

うそはものはんふすりるや
れやこ立ん孔和ばくすそ
れどあいふわを嘘ふすれぞ
ふれがばうまし五戒のれきて
生れいばるると佛は れふせ
まれを無常は乞命かぞ
よれふのれば物ばふるる
ゆばんはまれぞ不定のうきよ
あさん一生ものひはくよ
ものはふ頭死をすはとなぞ

ものはまさ死ば働きすして
うそはぬすみの先きやりと
実をいふてを皆うそふする
芝をはをれば人ばばくく
押はきばらら佛はをしく
人のいのちはすぐ死の露で
ものしし歩なし吹ふまぬ
宵の以痛ば冥途の三番
朔の空嘆ふ気おばくおとと
毎慶公衡をきんさとと

活てうゑのくいすをふぎろふ
なりれなるかゑいきみのこゝ
花のさらりハ十日おたゝず
それをまつゝぬと小町もたちぶ
位すれとそなのこふなるゝぬ
ふとうたなるゝ皇極様よ
釈迦の孔子と孔子ハ孔子も
ハふむつすー夫婦ゞやとて
ふうれちぎりハなるこの海よ
君ふさ死ぶち氏生死すゝび

馬頭ト牛頭とふ一ゑもでぬぞ
容貌よれとてゑ人を見る分
人ハさらうを十年たゝす
人のゑくときうなゞきめきれ
下女しきさ紀もめいどのたびハ
年ゞとれとてたのこふすゝぬ
親ふさ紀ぶちこなれさいご
かゝの楊夫妃李夫人おどハ
かゝれやくとく石山なすきゞ
森の諸鳥の狩ハ丹の別れ

獨去獨来なてふもなるゝぬ
おゝぶ領守ハ神明様も
ゆゝハ孔子もすこのそふ
ゑぬるいのちハ過去ゝきする
それふつまてゝ回果ハ理
過去をなきゝめくゝ氏ぶよ分ぞ
過去ですくゝこの世世でこくる
この世でつーん去ゑつセをいてハ
この世下ハくゝやゑりゞくとなるぞ
この世学者ゞおゞゝえゞよん分ぞ

沙波く世さ身ハ釈迦を始め
いのちゞひとそ祈禱ハセぬぞ
子路ゞ祈禱ハ毒ゝふおいゞ
それをことゞくハお祈ゝのいさゝ
こくときうゞバなゑきゞたこる
貴賤貧福ゑ家かゝれをを
過去で結人を弱ふとのそ
過去で結人をえさげるゑハ
過去で善法学ゝゝる月のそ
過去で仏法をしをとのハ

この世はんがやおしとる人ぞ
この世美人で愛敬せとる
この世醜陋できうられすぐ
この世乞食ぜんやうすぐで
この世富貴でふそくはやめで
この世長命まうと病とせと
この世多病でとう死すと
又もこの世ですくなまぢん
次の世でとと又とはおうふり
五逆十悪地ぞくのうまよ

過去で堪忍ぶをとすれば
過去でふつくふ腹をまろ
過去でけんこん旅きひ
過去でおろはは施すれば
過去でおろはは放生すれば
過去でおろはは殺生せしぐ
かまて仏を浄土とけり
毛すぐるどを狂はないで
五戒十善人天なまた
なるべやひの火宅を離れ

浄土まいりはその種まき乗
弥陀の浄土を信心ひとつ
ちやくぢ坊様てまを酒のひて
掛きれのく信者は身でま
この世のの世はさうれはまぐ
二十五おさうおむうひなする
すぐひ浄土の後生でなぐ
これふ楽まと蓮華座掛て、
れそれ多やとぐたはちすれば
仏のぢたいとうをそれのせる

六度万行八法仏は浄土
安楽ぶみる内謝と授て
ちんど表びのちりかふえん
臨終来迎たのゆびとても
法天音神さんおくうなされ
ぢひなれのふ表や諸多ふ
先ハ大悲乃観音様を
手履なぢ紙をぐおとくふかる
れらが本師の如来のお客
時小勢至八面多をちうを

ゑる行者を礼拝するさま
作せられば薬王菩薩
薬上菩薩は天蓋をもちて
文殊菩薩のたらすは華鬘
普賢菩薩は寶蓋持て
日蔵菩薩は瓔珞をもちて
日照菩薩の羯鼓のゑびき
月蔵菩薩は七寶の太鼓
金剛菩薩のは持は磬を
寶月菩薩の弾ずる琴は

さてそふすぐれしなと
不老不死と旛たてかざん
されも行者のたまりかぶん
又も行者の頭をかざ除
されも行者くさしかぶりまる
うきも行者のすがをかざる
四土不二法の由声をするぞ
平等大會と虚空ひびく
生死無明の雲をち掃ふ
四十二門乃聲すみとる

妙音菩薩はたらゝの琵琶は
宿王菩薩は漢弓は声を
陀羅尼菩薩の徴妙は舞は
師子吼菩薩は乱拍子名て
日光菩薩の焼香は匂ひ
虚空蔵菩薩のれいの鼓
山海菩薩を和琴を持て
月光菩薩の泗水の水を
華厳菩薩乃笛の音さて
弥勒菩薩乃笛乃音すぞ

常楽我浄のみのりを發
八聖道の紐を結さふ
一切衆生と袖ひるがへす
上求菩提とたちゆすする
天地四海ふかくゆがみつる
第一義諦とうちかゆ給ふ
六度万行とそのひゐさる
法界唯心とおそびなさる
高山頓大のみのりの声よ
十界千如乃声がするぞ

寶月菩薩の單栗きゆゑ
無邊菩薩の尺八かなでて
寶性菩薩も鐃鉢打て
地蔵菩薩の琴は錫杖
かなでぶつ紀喜楽笑絃

十八不共乃法門をかなる
四為と四品の音をあもよ
十方世界ふるびぶみつる
無佛世界度衆生とひぐく
乾達婆王の珊瑚の笛や

緊那羅竜王隣地の琴や
他化自在乃五妙の楽も
千や万倍おとるとなり
そよと風ふき入る時ハ
須弥の頂上糸生樹ども
伽毘羅城なる元夏樹の花も
閻浮無双の瞻浮の大樹
竟も万倍おとびハなんぞ
岸をうつ波音鐘のひびき
八乃功徳をそなへ〳〵水ぎ

変化天宮乃衆徳ハ鼓
五々のがさつの一種の楽ハ
又も浄土のたゝハ拍木
一葉ごとハ音楽れとなる
祇苑精舎ハ除勝の植木
摩黎山なる栴檀香樹
古きゝ浄土の寶樹ハ比ぶ
又も浄土のたゝハ御池
池の底ハ黄金ハ砂いきゝ
漫陀羅勝尼のすぐれ〳〵池も

印度才一無熱乃池を
般若所説の白鷺の池を
冨士ハ林子粒それゝ劣る
迦陵頻伽ハ五根と五力
白鵠孔雀ハ七覺八生
沙波乃鳥ハ天地の違〳〵
すゝる行者の馳走のためハ
波よりかゝつ寶樹ハ鳳凰
又を浄土の宮殿きゝやれ
銀の石礎隅隈乃はゝら

流水長者の野生の室池
みんな一所ハのめさとなを
池や林ハのべる誌鳥
鳧雁鴛鴦六度と四摂
鶏鵠舎利ハ十力四无為
かゝるおみのり鳥さんずゝて
大悲女菜の変化の鳥よ
百生千劫ゆゝとなり恵
孤隣の大地ハ金の地敬
珍隈のうつゝ孤陌の棟

摩尼のゐり拍真珠のとび
かゝる結構の宮殿かゝれぞ
都率天なる摩尼宝殿と
維摩大士乃自在の室も
あづかふせ給をゝるかれとる
いのちみじかたのしさうすん
常も衣裳も端かんむりも
應拔妙服代金いらず
千両万あでかゝれハせんぞ
万劫ゝらてをせんだくいるぬ

陂璃のゐみきて明月摩子
切利天なる喜見の城を
堅固長者はきぐもも鈸
いづき浄土の宮殿ハ比せば
かゝる御殿おすゆみをしても
今ハ法きせぬ元量の寿
自然とゐる果敢のかゝぐ
沙波へたゝゝきすす四面
垣やゐられつきたる浄土
かくる衣裳も因位の願で

十劫むゝふゐ者ゝてあさき
酒を肴も雑煮をくいゝを
自然とゐる百種の珍味
ちよッと一夜ヲ契ゝ妻を
六通自在ノ境界なれば
玉ゝ御殿で一所ゐすゝて
ざんざざんざでつどゐ
舞子塾者のかゝりと盛て
雑用花代さならもいゝび
あふひとつのゐれゝござる

きふきくと御すちゝるぐ
下女や家頼のやゐれいゝぬ
世々生々の兄弟れや子
名残かさねーふゆゝたゝと
婆婆のむかしの因縁ゐれて
春やゝゝゐや踊れや舞や
無数の天人無量の伎楽
ゐる行ゐをなぐさめなる
節季かけゝり夢もこぬぞ
きのふぞでむゝぞゝ歌子

後生きくひで三途こまづこ
ぢぐふこんゆるぐ天眼通じや
還相回向ハこのとき入用
釜は熱鐵水あろかげん
親のなりは孫子のみどこ
華のうてゑくともなひかへる
豆相回向ぐ行者のまゝ
多生有縁のさんどぐできる
ゑふ信えてたきてをるり
通俗俗身教歌大尾

いきもつうせぐ呵責のうえめ
そこで浄度のこゝ弥ぐれる
佛の浄度と同ぢきほぎい
みつる蝙ものすぐ風ぢゝち
そくぎれいりさいどをいさし
花の浄土ハまごとハすんぐ
ゑぐ身ひとつは仕合なぐ
みか扶さゝ少ゝけて
二世の安樂するやうになれ

親鸞上人北国配流

柔和忍辱の之味

てい　寄沢門徒は茅屋の咏し
廿八日は日ぐらしすれば
あすは娑婆世界は義まふ
源の海ぬくもあ稀はらもふ
飛葉ぐろりで月代寄し
梅雨ばっかりで年月送る
雷光稲妻矢を射るぬく
今ふ無常は日暮をかりて
足よまぐひの書ものや稀や
咲べ御さ侍孫ふ寄るあ我
今日へ神々と作業合まつら
夢幻罪ので日夜と唱し
腹も高くうつ笑ひも仕さま
大義大悲の海思ひ祖も
今日と寄ぬ安心ふ
ふ志浮無ふ者ひまつべ
耳と寄つぐ眼力きろべ
今浪財寄家義田畑

山を枯もうち拔ひく
弱き山路や三途の河
きえん浄く闇魔王
面ふるの河を沢あり
迦川おとれる獄千手劫
あぶれ泥ふてをバ作ぎ
浦かぶ叫べ生甲地獄ひと
道を絶きに我身はくて
見てを叫ぶ悪人をと
阿鼻地獄ん助ん

持もなるゆい拔しをなず
河伯羅殺ふ迦を
業は秤や浮頭雑浸
太を九し翻る山
渡うれ焦され火を切裂き
大地叫て七頭八倒
写もねそろし地獄の苦患
数の佛恵浮義恥か減て
見拔られる大罪人を
如思悔れをひを猟

河異の業や逢て逢ん 求
思び殺き沢志のバせ面ひ
被ふるそ人ご身に引絞て
一行横ぐも女人ゆ
旅一ぬふ初んまれ
嘗くたまふ初ん耳を
旅一ぬふ初ん身の肉を
拔さを殺ふ四身は貴ん
はゞせたまふ四分志殺を
志ゆ一を世界は大地のごとく

毒の中に七歳子多加
私一を人の其身地りに
一頭横ぐを見まゆ
河や喜は河横り中に
一頭河は海志ざいとく
罪布羅山の如くまり
子須弥山はごとくなり
大鉄囲山志ざいとくなり
三千世界は大地のごとく
四大海まり矢一とおざる

なほ女人を影ひ深く
女人成佛の誓ひを立て
稚児の御年八千歳を
かぞへくふ七る祖を
仰ぎぬひ一佛の御慈悲
る祖師人孫原氏一
終の御年九果の寿
紫花紫雲の御身はよげ
慈護和尚の御弟子と仰て
二十年来修行中に

五陵三位のさつりの香ゆく
重ねく慈悲菩提めで
法花の本経唱へふ
夜や天竺日本までも
知ぬ我成に知さんわふ
泥生ます一まん松慈の
悪や車を乗捨たまひ
娑婆八苦を無常を説し
比叡の山に登りを修ひ
業師始まく十日来り

文うたらひぐ都のわるさ
ちき歌ゆく百姓は
面やかつきや雪踏をけて
女人成佛近ばあ
拝を不思議や御愛想まて
結き流れ北御身のとう
玉家日本の御身をたつせ
義隆を聖尊も我ぞ乃ふ
南都北嶺北勝ふ長く
師弟結共御成の仇ま

慈悲を司の六角堂
三里余丁は山坂道を
岩伏越さ也加茂川越て
義へぬくゆく心に祈誓
御告ふ行さに名も吉水の
妻やを供て待を修ふ
人に笑き恥めらきて
義へ下さる慈佛門お
東都北嶺勝ふ長く
京を四条も義経修止
立佛や越後へ流されあふ

墨の衣と墨染衣染て
夏を苦中小句舞すも
風を吹袖を雪降中に
足を血汐に加賀関東
弥陀の御願軍さやおうん
牡牛よりも強きをめの
御恩浮世思ひをくるぶ
軍を出さハ兵事すべ
八家九宗と示す中に
うら浮世苦労有ひ

あんな神えや慳貪の
糸を四人も日本国中
実ハ長者のうら表に
桟法一練 釈尊 具足
何も角をこの世に六字ハ
芝居きのうやとうつる早く
楽北九さなら国ぞ世界
弥陀の中ハ六字北 潤
智恵といふ八方学いらず
罪も救ひもあ来よ仏の

弥陀の本願ハ
御仏道著く弘まぬひ
他力不思議の南無阿弥陀仏
助たまへと助ふ
義く拾てたくんて
黄さんそうやさかさ神
をくくと浮世ハ
丈と黄ふ多浮いらず
富も貧銭ハ
の浮ものを法ぶ

後を待ちぬべきものですぐふ
摂受法師の志願の不思議
娑婆世界に国土を厭ふ
かつふまとり殊勝なれば
善を悪義も富業法師
信ふかきぬ信を厭て
思ひ知しるべき世界を
仏祖知識の恩徳を
親ふ孝行をもとむるまひぞ
知るべき我仏の義忠知識

摂取不捨とて光明世に
今生何時命の尽くまと
華北風で神通自立
娑婆の世界美見しく
彼華紀きと無量寿仏
歌しひ悔ひの其下うを
命なぐ〳〵みてもちん
国土を捨を来べ守り
後世たりと五代の武理も
かるる法恩を法国に知べ

言ふ法ふ命を尋ねて附く
唱へまひるや南無阿弥陀仏

ほとけ

唱へ命頂戴ヤレ〳〵皆さん皆でもくらんまいおらが親父の釈迦とつかい
差ひとさかつ言ひずきふく親の思づりの信心すぐんといつぬりのば
ときろつり打まて十九の栄うつ西世界へ入いりて迦葉阿羅漢のあさ
りの他人師匠と称えて業つく水波影さとりてるえまとらへ三千
年ぬ初めて居宅一華厳とせ一結縁を代品とのの変らけ為き
どもぬあんまりこるいぐうひくぬ出ざるぬ文殊と普賢とふるう学さ
ぐ中と家のれ為へ紙布ぐかるさ仏耳も眼も聲〳〵やうまてざつつ学人

祈いさきでもいうなとか別者ってて鹿苑町に家建めさまっく。この合と
いう孤な妻とのあつめて夢らけされハナ男うもく居さきやどくが客ハ
集まつぬをこ弘まる。ちひ屋げく方寄殺笑や法華や没録こ
雲の機さくて代呂をのあてゞふ高ひとをの親父の仕うちふ須達と
ーてゞ名こい今りち減ふ右まてこ祇園を精舎とおくるひ陀林
とは新迦ゞさーあげつ家屋布施ーあひちんじゆうぬさこもちんとゆう。
天上天下ホ一人の親父ぶこ時法花経の高ひざのうは章安とーく。
ハ笑い女中ゞ法花経と笑うはちつくりのこ迦如来ちさまこさ
ーゆ人文殊の化地釈恵ぶあるうう悟と寄けい我いらゞ葉とハゞ
ろーひちゞひぶ又こそのとき舎利弗夫人とゞーセーー女中ーく。

知恵もえもいさまうまないのふ阿羅漢とおそ拘薬達多
と仏と合せく教も仏ます法ての中ゆ孝ゆ子さ拘薬達多
幸稚ハ不染開浄と中花を蔵ひくと経ひくと蔵ひくと経ひくと
三度さくの大病をかるる弟業あるるーーーーーーーーーーーー五陵
むうひくく遠ふたのめびお親迦ハ合点をヨツト業知ーく丈之の相ざ
ふかハ学ゞたくさあらふと四千年業年のかゞの月日を五義をさめく。
たーあこおのーーる更ハ見ーく南ーくーーーーーーーーーーーーーー
だーーく休ーーーの雅月華遠ふーーーーーーーーーーーーーーーーー
祝祭陀の中釈他力の名仏ゆ切把載忍惟の業味をひとつふ合
せく九めくこ業ゞたい宝の九業男も女七さんおさんごとさーん合ごぶ

らぬ命を元とさろうりいっかい口ふ任せ〻〻唱ふるざろりゞ他力の願系
ぞふぐこと方八公恵高僧者未得天眼知恵のないのと元あのないのもろ
くろ元ないい見よりかるは用ゐ系きろうりないぞと仏すめかされ
ゞ寺提ハりとろう五百の侍女まで妙ようゆ系ゆ拙さい
三世の法医師も記とかげこるち病なりぞ仏益ゆ稗吾樗と
平癒おされさうんと唱さん我ゞ唱ゞ喝らも葬祭者丈人も遠ゞ事
ない古家の祇園丸ひく四徒ト元ものつゝぬゞ行公要ゞ他力の急
佛あんまり妙遠ゞ唱ゞ妙ゞかゞまの者代吾とろと和ま
ちろう旅ひおこりて仏ゞ利ゞ代吾とのないと知識に向ろ
恵指人公元性敬佛四新迦ゞろうと系ふくえられば也業ゞ

ろう
完尔とろうふて文とる見ゞ孝法の沈公伝ひきとろの脈をひろひくえん
されゞ四新迦ゞ仏のものわまてんわのと孝逢面自一おゞと和ーや
ますかろうんユリヤ又ゞろうゞ逆立ーとのゞこと産婦を初めてやろうけ
まいろう猿ゞ脈ろくゞりつきます申ゞ脈ろまゞろ申ゞ背をゞや
されゞ大きれ見ふあふまろゞけんゞすでも考んゞろうゞとろと汎ゞろうえ
ゝまゞ三年むろうよ謙ゞろうゞる高豆ゞ合おりひ出ーて妙ゞ多ゞや
まくゞろふゞく我ゞゞゞ性まあい神い見ゞでもくいるのひ高豆ゞくまろよ
高ゞ敬意いゞのまあゞゞ乃ゞてゞてれゞ和ゞの手不ゞゞく我号
お拘ゞもゞの字ゞ備ゞる経字い見ゞ別とわくまゞくゞえ通ゞも和ゞよゞ
大日金胎毒和ゞゞの猫ひろゞく父母の猫ろう生まゞゞ我号ゞ直

り佛のくゝわぐゝんすと学よりくゝ侵ヲシアボキヤベイを学らけくゝん
ども。えゝもし拾ずふ。自分のあひ。きくゝくゝ。ばかホダラわゝ。
阿字やらう経字やらさつきりきつ。姉法経力即成
懈怠ゝこゝも結構なお業なれどと。我ひるがまるこで法華経八巻
読と叶ず。題目おわくゝ。有板よめども。えゝめがいゝ代品との
異ず。四十余年の未顕真実なんの事ぞと。尋くゝんくゝきべ。
法華経八軸。しろい名号。六字の名号八法華経の異ぞと。業ふ
ん。法華経八軸のゝ。ぶならべ。ゝ方極楽の浄土へ。きて
ゆくぐゝ。後てあるげる。何も。無ぶ。まりくゝて。ゝ。
えゝのいゝない南無阿弥陀佛とゝうるすつくだのむぐ

をゝちなんと。ゝくゝ。ゝくゝでんないゝ。嵐の夜ぐゝ。ゝくゝ。
二人ぐゝくゝて。飛ぶ。拾ふ。見も。利口なあひ。ゝ。ども。ゝて。我ゝ。
救ずぐ。ゝ。ゝ。ゝて。遣ハセ。ども。ぶ。ゝ。ゝ。ゝ。
半ぐゝ。見ゝ。ゝ。拾ゝ。嘆。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ぬと。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

うけて我らもこれより法をうけ千家の茶杓ぐらゐまでひなきまで昔(?)のまゝ
をうけても三井(?)法宗の祖師たち智恵もえらび山(?)おまでも六字
の名号を称へなさるで念仏して我等が智恵も相様もえらびもないから
自力の足なく他力の御祐(?)ぶりて十分に称へぬれ丈(?)ぞ
併(ひとへ)になるとは宗や尾(?)不思議に変じて念ずるのが支(?)が虚なるの
和尚様にも御説(?)とは云へど[illegible]
何とて申すでもあります儒教や神道や仏道が奥(?)[illegible]
学なんどが[illegible]て[illegible]ひろむまでも[illegible]
古い[illegible]おしやま[illegible]も我等が親父の[illegible]
とんじやうえ天竺[illegible]日本一[illegible]八宗九宗と[illegible]

じやう[illegible]出す代物をのいふことから[illegible]や[illegible]ぬ上人さまで
御勇(?)ひなさる法をまで守る織田の信長が法華と[illegible]となび
[illegible]宗門となされて太平天下へ治まりてまでも信公様の名まで
ないから申しく一代明智の謀叛なされまつ家康公も年
常々六字の九字の中でも御勇ひなされて浄土の御旗をとば
みなそ(?)天下となびこそ四海も太平御家をも続きし處でないぞこれを
[illegible]八幡(?)になされて六字の九字まで御家内ふすめて[illegible]絶さず用ひ
さうらふど御家も孫も繁昌息災延命御家内安全[illegible]
し御行様には[illegible]皆我等が味[illegible]御注(?)らぬ[illegible]流の[illegible]
いく

明治廿三年三月二日出版御届
仝　年仝月仝日印刷

版権所有

版権所有者
著作兼發賣者
新潟縣南蒲原郡三條町
字三之町八十番戸
高橋時造

發賣所

[illegible]　新[illegible]書林中　五泉町　淺堅六平　長岡町書林中
三條町書林中　菊塚町三條屋十郎　新津町　中村政治　小千谷町　西脇信次郎
燕町　神保豊吉　村上町　備前屋竹八　小須戸町　新保屋太吉　高田町　佐々木弥治
吉田町　矢作屋条次　中條町　須貝吉平　村松町　梅堅屋佐吉
白根町　中堅長造　新發田町　丁子屋新平　加茂町　清水屋金吾　柏崎町　桑堅庫之
巻町　清流堂　水原町　鳥屋六平　見附町　浅間長七　出雲崎町　小竹文助
仝　伊勢屋政治　亀田町　五十嵐平吉　今町　安岡屋音八　與板町　中川律平